水の都の乙女

姫青

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
水の都の乙女

【Ｎコード】
Ｎ５１６８Ｙ

【作者名】
姫青

【あらすじ】
チートな兄姉をもつ主人公が異世界トリップしちゃうお話。目が覚めたら……お城ですね、此処。平凡な女子高校生が男装させられたり、乙女になったり……ってお兄ちゃん、お姉ちゃん！？なんで此処にいるんですか！！？木佐原兄妹の異世界トリップ物語、末っ子編スタートです！！＊逆ハー風味の恋愛ファンタジーになる予定です。

プロローグ：騎士と聞いて想像するものはなんですか？

ぽてり・・・と鈍い音を響かせそしゃくするはずであったみかんがコタツの上に落ちる。
「開いた口が塞がらない」とはこのことだと実感する。
１１月２７日土曜日９時２７分。
クリスタルヒ〇シ君の某番組を見ていた私、木佐原希は声を大にして叫んだ。

「さっさと引退しろ！！」
ビシッと人差し指をテレビに向けのけぞってみせる。
「うっさい」
人の感情を無視して間髪いれずに投げつけられる姉の冷たい声に少し苛立ちながらも口をつぐむ私。

うん、だってさ。文句なんていってみ？
分殺ですよ。分殺。
多分秒殺もできるだろうけど、じりじりと苦しめるのが好きなお姉様断言しよう、あなたはドＳだと。
経験者にはわかるのです。
あの時のにっこり笑顔は氷の女王様のものだったと！！

そしてそこで口を開けて寝ているお兄様？
もともとはあなたのせいですよ！！？
いくら顔がよくてもあの時のことは一生忘れないからね……
この桁外れ兄姉めっ！
容姿端麗、頭脳明晰、と、まぁいわゆるチートですよ。この二人は。

ちょっと、過去の事がフラッシュバックしたが
まだ、熱はおさまらないので声には出さず脳内で批判大会をはじめる。

（みなさん、「騎士」と聞いて想像するのはなんですか？
えぇ、はい。そうですね、イケメンですよね？細マッチョですよね？
わかります、わかります。
世の乙女はそれを望んでいるんです。
決して、お腹の出ている老人を望んでいるのではありません。
ハゲもお断りなのです。
そうなんです。

……だから早く引退してそこの孫にその服きせやがれ、おっさん！
！）

思わず人差し指をビシッとテレビに向けると、またしても横から
「邪魔」
という氷の女王様ボイスが聞こえてくる。

しまったとおもい、横目でちらちらと姉の横顔を伺う。
もちろん警戒度ＭＡＸで。
我が姉はキレると物をなげてくる。
ケータイ、消しゴム、ティッシュ、エトセトラ、エトセトラ……。
幸い、今まで凶器となるものはなげてこなかったけれど。
しかしチートな姉だ、たとえティッシュでも皮膚が赤くなるくらいにはなる。

警戒という名のオーラをだし神経をとぎすましている私を姉は一瞥し、
「鯉にエサあげてきて」
と冷たく言い放った。

……了解です、ボス。

先ほど落としてしまったみかんを口にほおりいれ
掛けてあった羽織りに袖を通し、庭に出る。
澄んだ夜空に浮かぶ月に照らされた日本庭園をかけると
その足音が聞こえたのか池の鯉がぴちゃぴちゃと跳ねる。

「……ありがたくお食べー、私がこの寒い中ご飯もってきてあげたんだから」
エサを投げ入れると争奪戦が始まった。
その様子を近くで膝を抱えて観察する

（あいつ……
ふと目に付いた一匹の錦鯉。似ている。
誰に？もちろん騎士団のハゲでデブなおっさんに！！）

一度冷めていた苛立ちがふつふつと沸き起こる。

（あれはないよなー、騎士団とか言われたら期待しちゃうじゃん。
……平均年齢高すぎなんだよ。）
「はぁ～～～」
深く長いため息をつく。

さっき見ていた某番組でとある紳士の国の騎士団が紹介されていた。
私も世の乙女の一員であるからして、騎士団とやらに期待していた。

（なのに！！ＣＭも２つもはさんだくせに出てきたのは平均年齢６４．８歳の
おっさん集団だったなんて、誰が求めた！！
しかも、その横の孫！！笑ってないであんたがあの服着なさいよ！
というかプロデューサーでてこい！
この私がじっくりと需要と供給についてお話してあげようじゃないか、フフフフ……）

そうして一人ぶつくさ文句を言っていた私は気づかなかった。
背後に人がいることに。
そして、その人の手が私に伸びていることに。

ばっしゃーん

盛大な音と共に私は池に落ちた。

否、落とされた。
何者かによって。

プロローグ：騎士と聞いて想像するものはなんですか？（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
初めての作品ですが、お付き合いいただければ幸いです。

第1話：生活リズムは崩せない（前書き）

やや下品ネタです。ご注意ください。

第1話：生活リズムは崩せない

十一月の水は冷たい。
冷たいというより小さい針で刺されているかのような痛さだ。
中学生のとき水泳部に所属していたのですでに体験済み。
プール掃除のときに、緑色のプールに突き落とされるなどは毎年恒例の儀式ともいえる。
あれは春先だったけど、気温的には変わらないと思う。
目の前を錦鯉が通り過ぎる。
ゆらりとゆれる尾びれと共に泡がキラキラ光って……

「ぶっわっはーーー！！」

勢いよく水から顔を出す。

死ぬ、死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ！！

必死に灰に酸素を送り込むのと同時に顔についた水をはらう。
池の水なんてどんな微生物がいたものかわかったものじゃない。

「ふー、ふー」

ザバっと池からあがる際に、水を吸って重くなった服が体に絡みつく。

（寒い・・・。）

あまりにも冷たかったので、外の気温が暖かく感じる。
指先がもう氷のように冷たい。膝を折り地面に座り込む。
体を大量の水滴がつたって地面に落ちる感覚が気持ち悪い。
腕を池のへりにあずけまぶたを閉じる。

（つかれた……）

ふいに、タオルで体を包まれる。
きっとお姉ちゃんが気づいてきてくれたのだろう。
柔らかい感触にほっとする。
全身を包まれると力強い腕に持ち上げられた。
やがて聞こえてきた規則正しい鼓動の音を聞きながら、眠りに落ちた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊

「…………ここ、どこですか？…」

目を覚ました私の前に飛び込んできたのは、天蓋付きベッド。
そして、なんとも愛らしい家具たち

……たしかに、私の部屋にはベッドがおいてあるし、可愛いものも少しはある。
しかし！だ、我が家は築１２０年の日本家屋でございますよ！！
こんなレースとフリルとリボンをふんだんに使ったお部屋なんて歴史の教科書の
写真でしかみたことありません！！

明らかに自分の部屋ではない光景に頭の中が混乱する。

（…夢……？）

手の甲でぐいぐいと目元をこする。
ついでに伸びもして、眠っていた神経たちを呼び起こす。

（……変わらない…）

何度、目をまたたいても、景色は一向に変わらない。
むしろ、クリアに広がる景色が「現実」なのだと呼び起こした神経にうったえかけている。

手に触れるシーツの感触が実際のものだと理解すると、体の奥がなぜかむずむずする。

「……どうしよう…。」

むずむず感に堪えられず、ベッドからおりる。
辺りをみまわすと扉が三つあり、明らかに装飾の少ない二つに近寄る。
近いほうのドアノブをまわし、扉を開ける。

中には洗面台とお風呂があった。
そしてその隅のガラス板の向こうには、洋式トイレが佇んでいた。

「よしっ！」

思わず声をあげる。

異世界トリップ1日目の朝の出来事。

第1話：生活リズムは崩せない（後書き）

希ちゃんは、朝起きたらすぐトイレ派です。
こんなに図太くなるはずじゃなかったんですが・・・

第2話：寝起きはボーっとしてるものです！（前書き）

（　）内は希ちゃんが意識して考えてる事です。

第2話：寝起きはボーっとしてるものです！

「ふー、落ち着いた～。」

顔も洗って、すっきり度１００％で最初の部屋に戻る。
やっぱり、そこはお姫様チックなお部屋だったけれど
さっきよりは気分も落ち着いて、冷静に頭が働きそう。

もう一度しっかりと部屋をぐるりと見回すと大きな出窓があった。

（！！あれは！）

小走りで、窓に近づく。

（ああ、なんということでしょう……この出窓…
ピーターパンのウエンディのお部屋にそっくりです
この大きさといい、段になって腰掛けられるのといい、何よりもこのクッションのふかふか加減！！
私の想像そのまんまではありませんか！！）

ビィフォアー〇フターのアナウンサーばりの解説で出窓をほめたたえる。
右手を伸ばしてクッションの感触を堪能するだけではたりなくなって、そっと薄いピンクのクッションで覆われた段に腰掛ける。
クッションの弾力が私の体重を軽く押し返しながらも、やさしく包み込んでくれる。

何コレ！？すごく心地いいです！
純日本家屋の我が家には、ソファなんてものなかったし、ましてや出窓なんておしゃれなものなかったもんなー。

我が姉様の「体が痛いからベッドがいい」発言により、数年前からベッドが導入されたけど、ニ〇リのパイプベッドは軋むので寝返りを打つたびにキィキィと鳴った。
夜、廊下を歩いているときに、誰かの部屋からキィキィ音が漏れてきたときは心臓が止まるかと思った。

夜中の小さな音が怖い。これぞ日本家屋あるあるだ。

視線を窓の外に写すと広い庭園が見えた。
噴水を中心に迷路のように庭が広がっている。
緑の迷路には色鮮やかな花も咲いていて、パッと庭を明るく見せている。
心なしか小鳥のさえずりも聞こえてくる気がする。

（あの花、薔薇かな？薔薇だといいな。
やっぱりこんなに豪華なお庭には薔薇が似合うもんね。
……ホント、すごいなぁ…なんかお城みたい…）

小さいころはお姫様とかが大好きで、よくお姉ちゃんに遊んでもらったなぁと幼き日を思い出すと笑みがこぼれた。

（まぁ、たいてい私が侍女役だったけどね……）
口元の笑みが苦笑にかわる。
視界にキラキラと光る取っ手を確認する。

（窓、開くかな…？）

目の前にある金具に手を伸ばす。
つまみをつまんで回すとカチャっと音がした。
取っ手を握ってぐっと押してみるがびくともしない。
たてつけでも悪いのかな。
さらに力をいれて押してみるが結果は同じ。

これは……「押してだめなら引いてみろ」ってやつ！？
だとしたら、ものすごく恥ずかしいんだけど…。
十回くらい押してたよ…。

ごくりとのどを鳴らし、勢いよく手前に引く。

パキッ

小さな音と同時に感じる浮遊感。

直後にどんっと背中に痛みを感じる。

「いっつ〜〜〜」

背骨打った・・・。

背中をさすりながら、手の中のものをみて青ざめる。

（ぎゃーーーーーー！！

壊した？壊れた？壊した！！！壊しちゃったよ！！

どーしよう！！やっぱりコレってあれですか。

高いですか？高いですよね！？いやにピカピカ光るものが装飾に使われてますからね！

しかも、こんなお城みたいなところのものなんて弁償できる額じゃな…ぃ…）

お城？――どこが？

弁償？――誰に？

……あぁぁぁぁぁぁーーーーーーーーーーー！！

（そうだよ、ここ何処ですか！そしてこの格好なんですか？）
思い出した現状に混乱しながら自分の着ている服を見下ろす。
―――リボンとフリルたっぷりの白のワンピースって！
手がじわじわと嫌な汗で湿ってくる。

（落ち着け！冷静に考えろ、自分！！）
さっとその場で正座をし自問自答をはじめる。
（ここはどこ？――――お城です……多分
何でここにいるの？――――わかるか！
日本だよね？――――……。）

数十秒思案したのち信じられない結論に達したが、まだ決め付けるのは早い……よね？
物事はしっかり確認することが大事である。

（大丈夫、ここがどこかもうすぐわかるはず！！）
ぐっと右手を握り締める。

コンコン

ガチャ

ノックの音に続きドアノブが回される。

扉を開けて入ってきたのは、茶髪の男だった。

思わず目を見開く。

（どうしよう……。全然わっかんない！！）

――――希の考える日本ならば黒髪、王道なら金髪論は通用しなかった。

第3話：初対面の人との距離は大切です（前書き）

今回は短めです。

第3話：初対面の人との距離は大切です

扉を開けて入ってきたのは、茶髪の人でした。

目を見開いている私をみて何を思ったか男も目を見開く。
何だろうといぶかしむと、すぐさま男は同じような表情をする。

……真似してるんですか？
いや、馬鹿にしてるのか？

じっとみつめてくる視線に耐えられず頭をさげるとすぐに

「大丈夫ですか！？」

と男が駆け寄ってくる。
男はさっと方膝立ちになり、左手に壊れた（壊した）取っ手を握り、
正座をしている私の腰と首の後ろ辺りをしっかりと支える。
腰に回される手にびくりとしてしまい、思わず上体が前に倒れる。
前にいた男の肩にあごをのせる形になってしまった。
男の体が一瞬ぴくりと動いたと思ったら、なぜか今までよりもしっかりと抱えられる。

……あれ？なにこれ、なんか体が包まれてる感がするんですけど！？
これって、別の言い方をすれば抱きしめられているともいいませんでしたっけぇ！！

心の中で悲鳴をあげる。
バっと体を後ろへそらすとハシバミ色の瞳と視線がぶつかる。
距離にして約１０ｃｍ。
近くでみる男の顔立ちに口を鯉のようにパクパクとさせる。

…あ、あぁ……ぃっ、イケメンじゃぁありませんか！！

少し切れ長の目、薄めの唇、コーヒー色の髪の毛は少し短めだった。
なんといってもキメの細かい肌は、黄色人種でも、白人ともすこし違う色をしていた。
そのことが、私の推測を後押しする。

「顔が赤いですね……風邪でもひかれましたか？」

声をだせない私をよそに男は手を私のおでこにそっとあてる。

いいいいいいややややややぁあ！

叫びたい衝動を必死にこらえ主張する。

「だっ、大丈夫です！！」

男の手を振り切り、さっと立ち上がり数歩後ろへ下がる。
男も立ち上がりせっかく広げた距離を詰めながら心配そうに声をかけてくる。

「熱はなさそうですが、顔が赤いのは心配ですね」
「いっいえ！全然いりません、心配！！」

なんか文法がおかしくなったけどこっちは必死なんです！
平凡な女子校生にあなたの顔は破壊力ありすぎなんですよ！！

近づいてくる男に顔の前で手をふって、いりませんアピールをする。
そしてまた数歩下がる私に男の目尻が少し下がったように見えた。

（……ん？笑われた？）

ちょっとむっとして見ると、男はさっきと変わらず心配そうな顔をしていた。

（…気のせいか……）

第3話：初対面の人との距離は大切です（後書き）

急いで書いたので手直すかもしれません。

第４話：つぶやきは無視されるのが世の常です（前書き）

途中から視点が変わります。

第４話：つぶやきは無視されるのが世の常です

「失礼します。」

目の前の男から数歩下がった瞬間かわいい声とともに１６歳くらいの女の子が入ってきた。

あっぶなー！！あと数十秒早かったらいろいろとおかしな事になってたよね！？

……いや、もしかして見てて入りづらかった可能性とかもあり？

あぁぁぁ、あれはちょっとした事故ですから！

そりゃ最後なんかギュってなりましたけど、そういうことじゃないですよ！……ね？

ちらりと男を盗み見ると少女の方に振り返り、私の前に来るようにうながしていた。

少女は足早に近づき男の横に並ぶ。エメラルドグリーンの瞳が部屋に差し込む光できらきらと輝く。

少女が横に並ぶと、男は流れるような仕草で私の手をとり、ちゅっと小さく音を立てキスをした。

えーーーーーー！！

この流れでしますか普通！？

絶対いりませんよね？

ほら、隣の子目細めちゃってるよ！

エメラルドグリーンの瞳がすぅっと細められるのが視界に入った。

こんなこと普通の人にやられたら吐き気がするだろう。
それでも、いきなりで意味不明な行動があまりに自然で様になっているから、むしろカッコいいとさえ思ってしまう。
イケメンって恐ろしい。

「ご挨拶が遅れました。クイスピス国騎士団、第一部隊副隊長のシュゼ・ハクス・アーベルです。」

男――――シュゼは顔を上げにっこりと告げた。
…騎士団？ってかクイスピス国って言った？

シュゼが後ろに一歩下がると、今度は女の子がきれいな仕草でお辞儀をする。
腰まで届く蜂蜜色のふわふわカールヘアがゆれる。

「今日から侍女としてお世話をさせていただきます、ゼラ・リース・クラウドです。」

にっこりと微笑むゼラは天使みたいにかわいい。
けど、そろそろ真面目に確認したいんです。
がんばってゼラの天使の笑みを真似ながら自己紹介をはじめる。

「木佐原希です。あの、一つ確認したいんですがここって日ほ「異世界です。」……なんですか。」
「それって、異世界召喚とかいうの「ではないですよ。」……ですか。」

笑顔で私の疑問を全否定してくるシュゼ。
しかもわざわざ被せて。

「そう、ですか……。」
力ない返事を返す私。
「あら？驚かれないんですか？」
不思議そうに私をみるゼラに苦笑いを返す。
「えぇ、まぁなんとなくそうじゃないかと思ってましたから……。」
いやさ、信じたくなかったけどね？
言葉をかぶせてくるくらいの勢いで全否定されたら、現実として受け止めるしかないでしょう……

ショックで放心状態の私の事は無視して話は進む。
「そうですか。ではまずは着替えていただきましょう。ゼラ。」
シュゼがゼラに声をかけるとゼラが私をベッドの方へとうながす。
ゼラは私をベッドに座らせるとプチプチと私の前ボタンをはずしていく。
ピッピー、イエローカード
「ちょっ、いや、ひとりで着替えれるよ！！？」
危ない、うっかり脱がされるところでした。

（お決まりだから予想はしてたけど、服くらい着替えられるし、だいたいシュゼの前では脱げないって！）

ちらりとシュゼを見やるとちょうど部屋から出て行ったところだった。

行動が早くて何よりです。

「いえ、コレが私の仕事ですし、着方がわかりませんでしょう？恥ずかしがらないで下さい。」

困ったように笑う姿はやっぱり天使のもので、うなずきそうになる。しかし、ここで負けてはいけない。いくらなんでも、自分より年下の子に着替えを手伝ってもらうなんて気分が悪い。

「で、でも、見たところパンツスタイルだし、大丈夫だよ！だからゼラちゃんは外で待ってて？」

ここはゆずらない！！といった顔で言うとしぶしぶながらも了承してくれた。
ドレスならともかく、パンツなら大丈夫だろう。

「……わかりました。ですが、わからないところがあったらすぐに呼んでくださいね。あと、
どうかゼラとお呼びください。」

そう言い残すと手に持っていた服を私に手渡して、ゼラは扉を開け

て出て行った。

（異世界か……
まさかそんな事が本当に、しかも自分に起こるとはね…）

手渡された服に着替えながら、クラスで流行っていたラノベを思い出して微笑する。

（…まぁ、がんばってみますか……）

出窓からさしこむ光がキラキラとよく晴れた青空を背景に光っていた。

「でも……私、もどれるんだよね？」

つぶやいた言葉はぽかんと開いた口に吸い込まれた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「あなた、いつからそんなキャラになったの？」

ゼラは廊下に出ると、壁に寄りかかっている幼馴染に声をかけた。

「や、だってあの子の反応かなりおもしろいじゃん。思ってることがすぐ顔に出るし。」

さっきとは打って変わって砕けた調子で答えたのは――――シュゼだった。

「確かに私も、こんな小さい子にお世話してもらうなんて！っていうような顔されたけど、今日からは私のお仕えする方なんだから、からかわないでほしいわ。」

ぷぅっと頬を膨らます仕草はどこから見ても幼い少女にしかみえない。

「おい。２６にもなる女がそんな事するなよ。」

シュゼはやれやれといった表情で首を軽く揺らす。

「あら、でもキサハラ様は自分より年下だと思ってるわよ。」

「その見た目で今までどれだけの奴が騙されてきたか………全く、恐ろしい隊長だぜ。」

クイスピス国騎士団、第一部隊隊長、ゼラ・リース・クラウド。

これが彼女の本当の肩書きだった。

「失礼なことを言うのね。……で、言われたとおり彼女に渡してきたけど、いったいどういうつもりなのかしら。あの人は。」

「さぁな、あー早く出てこないかなぁ。」

うーんと考え込むゼラをよそにシュゼがくっくっと楽しそうに笑う。

迎えにいった部屋には１６歳くらいの少女がうずくまっていた。

自分を見るなり見開かれた瞳は漆黒だった。

———夜の王（ルノ）を連想させる黒真珠のような瞳と、上質な絹のように艶やかな黒髪に思わず目を見開く。

直後、少女の眉間にしわがより、がっくりとうなだれる。

正直、あせった。

少女の目が覚めた事は１０分以上前に知っていた。

だが、そう深く考えずのんびりとここまできてしまった。

彼女を守るのが、与えられた自分の役目。

もし彼女が慣れないもので怪我をしてしまったというなら……それは自分の責任だ。

急いで駆けつけ体を支えると、トンっと体を預けてきた。

その行動があまりに無邪気で愛らしく感じられた。

指に絡まる黒髪のやわらかさに儚さを感じ、腕の力を強めてしまう。

そっと少女の頭をなでようとすると、バっと体をそらせ目をまん丸

に見開く。
今にも消えそうな儚さをまとっていながらもその瞳には強い光が宿っていた。
その瞳をじっとみつめていると、急に何か言いたげに口を開けたり閉じたりしはじめた。
その顔は真っ赤だった。

照れているのだとわかると少し意地悪してみたくなった。
おでこに手をあててみれば急に立ち上がり、大丈夫だと主張された。

おもしろい。

ちょっとからかってみればすぐ思っていることが顔にでてあせっているのが見てとれる。
さらには一歩近づけば一歩下がるしまつ。
さっきまでの儚さはどこへいったのか、微塵も感じられなかった。

必死に間をとっていた少女は次はいったいどんな反応をみせてくれるのか。

「はやく、着替え終わらないかなー。」
小さく、つぶやく。

第5話：いじめを受けたら白旗を

口がぽかんと開く。
あぁ……今日で何回目？この動作。
これはきっと癖になってるなと思いながら自分の格好をもう一度確かめる。

白のシャツに、チェックのベスト、ネクタイに黒っぽいのジャケット。
そしてパンツはパンツでもブーツの中に入れるアレ。

なんだろうね、この英国紳士感？
「お手をどうぞ、レディ？ちゅっ」みたいな事やりそうな感じ？
やっぱりこれってさ、あれだよね。

いじめ？

いじめですよね？だってさ、だってさ！？

さっきまで私が着てた服ワンピースだし！た、体型だって平均以上ですよ？

……嘘です。ごめんなさい。よくて平均です。

どっちにしてもあきらかな女の子服着させられてたんだから、これはもういじめ決定ですか……。
だってコレ、どっからどうみても男物だもん……。

部屋の隅においてあった姿見で自分の姿を確認し、肩を落とす。
なんでだろう、さっきのワンピースよりもこっちの方が似合っている気がするのは。
二重のぱっちりとした目と抜いたり画いたりしていない形のよい眉がりりしく、中性的な顔にみせているのかもしれない。
それでもやっぱりこの格好に長い髪は似合わないので部屋においてあった白いリボンで髪の毛を後ろで結ぶ。

（……男だ……）

姿見に映っていたのは、ジェントルマンという言葉が似合いそうな青年だった。

（……すごいこれなら学祭で男子役やってもよかったかも……）

女子高の学園祭での演劇の出し物はたいてい恋愛ものなわけで、
必然的に男装する生徒がでてくるわけだ。
いまどき珍しい胸下まで伸びる黒髪という容姿から主役に抜擢されたのはいいが、浮かれて家族に話す必要はなかった。

（……いや、やってたら絶対に殺されてるな…）

がっくりとうなだれていた顔をあげると、もう着替え始めて３０分も経っていた。
二人を廊下に出したということはすなわち３０分廊下に待たせていることになる。

（急がなきゃ！！）

身なりをさっと整え、ベッドの上に散らかしたリボンの束をまとめ、二人が待っている廊下へ続く扉を勢いよく開けた。

「……似合っていますね…。」
「えぇ、とても…。」
飛び出してきた私の姿を見てうんうんと頷く二人。

えぇぇーーー！
あぁ……これも何回目？…

じゃなくて！そっちでしたか！私のこと男だと思ってたんですね…。
……ん？
それって、さっきのワンピースは？もしかして、そっちがいじめでしたか！？

結局、私の性別がどっちでもいじめられてるんじゃん！！と脳内で嘆きながら、ジャケットの胸ポケットから見える白いハンカチに手を伸ばす。

ひらひらひら……

「……何しているんですか？」
シュゼがきょとんとしながら私の振っている白いハンカチに目を向ける。

「……降参です。すみません、言われたことはきちんとしますんでいじめないで下さい…。」
しょぼしょぼと告げる私にゼラは大慌てで
「いじめてなんていませんよ！？」
と否定する。

でもね、どうみたっていじめでしょ。

「男装しろと言うのならしますけど、こういうやり方は精神的なダメージが……。」
ですから……と続ける私の前でくっくっと笑い声が聞こえる。
視線を上に向けると、シュゼがおかしそうに笑っていた。

「くっくっ……その服男物だとわかってて着てきたの？あんた。しかも髪まで自分で結んでるし。」

そーですよ、わかってましたよ、いじめだってことは！！……って、え？

「申し訳ありません！そういうつもりで似合っているといったわけではないんですが……本当にキサハラ様がお綺麗で…。」
必死に謝罪をするゼラはやっぱりかわいい。でも、そんなことより聞き捨てならない言葉が……。

「……そんなキャラでしたっけ？」
ゼラの言葉を無視してシュゼに質問するのは気が引けるが…
…許してください！私の騎士に対するジェントルマンイメージが危機に陥っている気がするので！！

ゼラに視線だけで謝り、シュゼに視線を戻すとシュゼはにっこりと上品な笑みを浮かべていた。
そして――――

「はじめまして。シュゼ・ハクス・アーベルです。」

ちゅっとリップ音をたて、私の頬にキスをした。

「っ！！」
あまりの衝撃に背後に倒れこむようにして数歩さがる。

ゴッ

後頭部の痛みとともに遠ざかっていく意識のなかで、がっしりとした腕に支えられた気がした。

第5話：いじめを受けたら白旗を（後書き）

急ぎ投稿なので誤字・脱字があるかもしれません。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5168y/

水の都の乙女

2011年11月20日12時11分発行